

栄養学的な見地からメニュー開発に協力 丸山ゼミと松坂屋名古屋店が食のコラボ

生活環境学部食環境栄養学科の丸山ゼミに所属し、管理栄養士をめざす4年生10人が「ヘルシー・ビューティー・エコ・地産地消」をテーマに松坂屋名古屋店の3つのレストランのメニュー開発に協力。去る5月24日に試食会が行われました。

丸山ゼミでは約5年前からレストランとのこうした試みを実践。松坂屋名古屋店への協力は一昨年に引き続き2回目となります。ゼミの担当教授である丸山智美先生は「管理栄養士の仕事は病院食などの栄養計算が中心で、健康者の方々においしいと提供いただける料理を提案する機会はありません。この試みは公衆栄養学の実践になり、学生にとって大変勉強になるといいます」と話します。

学生は3人1組になり、和食の「中村孝明 NAGOYA」、フランス料理の「グランファミーユ・シェ松尾」、洋食の「ステーキハウスビーフオークマ」に分かれて各レシピの栄養を計算。特に和食は塩分が高めのため、学生たちは魚の量を減らして野菜を多くしたり、漬物を減らしたりと工夫をしました。またフランス料理でも食物繊維を増やすためにロールパンをライ麦



丸山智美先生と4年生のゼミ学生



アンチエイジングなど「美」に関心が高まる中、今回のテーマはまさに旬。学生さんとともにすばらしいメニューができたと思います。

グランファミーユ・シェ松尾 名古屋松坂屋店
料理長 片岡晃治さん

パンに変える、ポトフの野菜を多くするなどの提案を行いました。

こうした提案は丸山先生を通じて松坂屋名古屋店の各レストランシェフにフィードバックされます。企画担当の塚本章さんは「レシピのとても細かい部分まできちんと検討され、計算してあり、私もシェフも学生の皆さんの真摯な姿勢と意識の高さに驚きました。一昨年は初めてということもあって何度もやりとりがありましたが、今回は期間も短く大変スムーズに行うことができよかったです」と学生たちの取り組みにも感謝の様子でした。

試食会では自分たちが協力した料理を実際に味わって、学生たちも感動。「おいしかった」という声のほかに「普段の実習とは違い、一般の人々がおいしいと思う味の提案は大変勉強になった」など今回の企画で学んだことも聞かれました。「今後も定期的に行えたら」という塚本章さんの声を受け、丸山先生も「お話があればまたぜひ行いたい」と話します。こうした体験を通して、これからも学生たちの学びの場がどんどんと広がることを期待します。



これまで味や彩りを大切にしてきましたが、栄養価を数字にした事で思わぬ発見があり、私たちもともに学ぶことができたと思います。

中村孝明 NAGOYA
調理長補佐 山本匠さん



部位選びや調理の方法にも一工夫を加え、多くの野菜を付け合わせることで、ステーキをテーマに沿った料理に仕上げることができました。

STEAK HOUSE Beef Okuma
シェフ 佐藤貴志さん

□メニューの改善点、苦労した点

和食を担当しましたが、最初のレシピはタンパク質が多く栄養バランスがあまりよくなかったので、魚を減らして野菜を増やす、塩分を減らすことに努力しました。

近松 佳世さん

□実際の料理を味わって思ったこと

普段の実習で作る料理は塩分控えめなので、こうしたメニュー作成に関わり、あらためて健康者がおいしいと思う料理の味を知ることができて勉強になりました。

杉谷 侑美さん

□この経験から学んだこと

食事の味だけではなく、サービスの仕方や食器の使い方など大変勉強になりました。病院や施設でも栄養面だけではなく、こういう提案ができればいいと思いました。

小林 亜美さん

グランファミーユ・シェ松尾 名古屋松坂屋店



STEAK HOUSE Beef Okuma



中村孝明 NAGOYA



Information

ごちそうパラダイス グランドオープンフェア 金城学院大学コラボメニュー

人々の健康と食意識の向上に貢献できるスペシャリスト(管理栄養士)を目指し日々勉学に励み、高度な専門性を身につけた学生が構築したレシピの提供を受け、上記3店舗のレストランが金城学院大学コラボメニューを提供します。

2013年6月19日(水)～7月9日(火)の期間、松坂屋名古屋本店 本館9・10階にて開催

55名の元気な子どもたちが新しく仲間 幼稚園で今年も入園式を実施



4月12日、幼稚園では入園式を行いました。この日は転園児を含めた55名の子どもたちが、保護者に手を引かれ、少し緊張した面持ちで登園しました。玄関では胸にコサージュを、クラスでは担任の保育者から名札を付けてもらい、「よかったね」とお母さんに声をかけられて嬉しそうににっこり笑みを浮かべる子どももいました。

入園式は、礼拝の形で進められます。初めて「聖書」に触れ、「お祈り」をする方々がほとんどだったと思いますが、子どもたちはお父さんやお母さんの隣りにちょこんと座り、一生懸命お話を聞き、保育者の真似をして手を組んでいました。

入園式の後には、子どもたちのみ保育者と共に自分のクラスに移動し、少しの時間遊びます。持ってきた真新しいクレパスを出して絵を描いたり、粘土で思い思いの物を作ったりと、自分のやりたい遊びを見つける姿に頼もしさを感じるひと時でした。

そして次の日、在園児は初めて新入園の年少児に出会いました。それまでクラスの中を飾るなど入園式に向けて準備をし、年少児が来るのを楽しみに待っていた年長児と年中児。「お世話するの大変」と言いつつも、小さな年少児から「おいちゃん」「おねえちゃん」と呼ばれることにちょっぴりくすぐったさを感じながら、年少児を助けてくれています。



この一年も、私たち保育者は神さまから託された子どもたち一人ひとりに寄り添い、祈り合って歩んでいきたいと思っています。

子どもにとっても保護者にとっても充実した時間に トライアルを経て預かり保育いよいよスタート!

幼稚園では前年度3学期のトライアル期間を経て、今年4月からいよいよ預かり保育が本格的にスタートしました。

保育後遊戯室に集まった子どもたちは、リュックを棚に片付けて身支度を終え、預かり保育担当者のもとに集合します。2時間の保育時間内にはおやつを食べたり、絵本を読んでもらう時間やその日の預かり保育を振り返って遊びを紹介する時間を持つこともあります。先日は大学構内で自然散策も行われました。今後もクッキングなど、通常保育同様に子どもたちが自ら考え、実行する力を育むさまざまな計画を立てていく予定です。

同じ子どもたちが毎日預かり保育に参加しているわけではありませんが、家庭で過ごす時

と同様に、どの子どもにとってもリラックスした状態で過ごせる空間となるように努力しています。さらに園で過ごした時間が、翌日以降の通常保育や預かり保育に向けて遊びの継続であったり、友人関係作りであったりと様々な形で繋がっていくことを期待しています。

子育て支援の一貫として始まった預かり保育。子どもと離れて過ごす時間が保護者一人ひとりにとって自己実現するための充実した時間となり、心にゆとりを持って子どもたちを迎え、子育ての楽しさをあらためて実感できる支援となるように、職員一同これからも力を入れて頑張っていきます。今後の預かり保育が子どもにとっても保護者にとっても豊かな時間となることを期待します。



幼少からバレエを続けてきた成果を発揮し 全国コンクールで見事1位を受賞

高校1年生の永田瑞穂さんが、4月2・3日に東京・めぐろパーシモンホールで行われた「全国舞踊コンクール/バレエ」のバレエジュニアの部で名作「エスメラルダ」のバリエーションを華麗に踊り、見事1位に輝きました。

永田さんは3歳の時からバレエを習い初めて以来、ほぼ毎日のようにレッスンを続けています。平日は2時間、休日には3～4時間レッスンをしますが、「辞めたいと思ったことは一度もありません。バレエはとても楽しい。音楽に合わせて踊っていると嬉しい気持ちになります」と話します。

今回の大会前にはバレエ特有の痛みである足の三角骨障害になり、手術をしました。1週間ほど入院しましたが、「手術後は痛

みもなくなり、順調に大会を迎えることができました」と永田さんは振り返ります。

当日、大会で予選を通過したのは195人中35人。「35人の中に入れるとも思っていな



かったので、まさか1位になれるとは思っていませんでした」とその時の喜びを語ります。

「憧れの人はオーレリ・デュボン」と話す永田さん。「将来はプロのダンサーをめざして頑張りたい」と夢に向かってこれからも一生懸命バレエを続けていきます。



今回の受賞

- ◆文部科学大臣賞
- ◆東京都知事賞
- ◆東京新聞賞
- ◆バレエ協会賞
- ◆財団賞

2012年度卒業生の進路状況

金城学院大学へは225名が進学

外部受験では医学部12名や慶応義塾大5名など合格

今年度の金城学院大学への進学者数は、内部推薦者204名に一般推薦・受験での進学者21名を加えて計225名(卒業生全体の61.3%)で、内部推薦での生徒は、ほとんどが第一希望の学科に進学をすることができました。

外部受験コースでは、北海道大・筑波大・名古屋大などの国公立大学をはじめ、一部浪人も加えると理系(Ⅲコース)では医学部医学科12名・歯学部13名(うち愛知学院大歯学部8名)など医・歯・薬・看護系の進学者が目立ち

ました。

文系では慶応義塾大5名を始め、早稲田大・上智大、青山学院大3名・立教大4名・中央大4名・同志社大8名・立命館大18名・南山大43名など、難関校にも多くの合格者を出すことができました。また「関西学院大学との協定校推薦制度」を利用し、今年度も9名の生徒が推薦され、関西学院大学の各学部へ進学をしています。

卒業生の今後のご活躍をお祈りしています。

国公立大	6
私立大	105
金城学院大	225
国公立短期大	0
私立短期大	3
専修・各種学校	2
就職	0
進学準備	22
海外留学	4
卒業生総数	367

(進学者実数)

中学校テニス部が 全国選抜中学校テニス大会に出場

中学校のテニス部は今回、愛知県予選から東海地区の予選を勝ち進み、香川県で開催された全国選抜大会に出場することができました。

全国選抜大会では予選リーグで1勝1敗という結果となり、残念ながら決勝トーナメントに出場することはできませんでした。大変悔しい思いをしましたが、「全国大会で1勝を挙げることができた」と部員全員の大きな励みにもなり、自信にもつながりました。また今大会を通して多くの課題が見つかり、練習にも反映させていきます。次は夏の大会に向けて、テニス部一丸となってさらに練習に励んでいきます。



素直な言葉が評価され 高校1年生の粕谷さんが最優秀賞に

高校1年生の粕谷奈央さんが、中学3年生の最後に「青少年読書感想文愛知県コンクール」で最優秀賞を受賞、中学校の講堂で表彰式が行われました。粕谷さんが選んだ本はクラスの読書会で選ばれた課題図書「ぼくは勉強ができない」です。主人公が高校生の男子であったこと、勉強ができなくてもいいと思っていたけれど最後はやはりできたほうがいいというストーリーに「同世代の親近感を覚え、楽しく読み進

むことができました」と粕谷さんは話します。また主人公が将来について悩んでいることについても共感し、等身大の自分の考えや思いを綴りました。それが「難しい言葉を使わず、素直な高校生らしい言葉で書かれていた」と評価され、今回の受賞となりました。

粕谷さんは特に作家の森見登美彦さんの小説を好んでよく読むとのこと。「これから



と粕谷さんは話します。今後も粕谷さんのすばらしい感想文に期待します。

勉強ができるようになりたい

私が勉強している理由は、母にうるさく言われて、ということもあるけれど、「将来」が不安なのだと思う。「夢」や「将来」というのは、どれだけ想像してみても、今の自分と結びついている感じがしなくて、どこか遠い場所にあるような気がしてしまう。だからといってテキトーに進路を考えているわけではない。それは、生まれ変わったら何になりたいのか、というのに似ていると思う。

こんな風にあやふやな状態だから、「将来」になんとか不安を抱き、なんとか勉強をして、「これできっと大丈夫だ」と自分に言い聞かせている。読書会の時に誰かが言っていた、「勉強は人生の保険」というのが、ぴたりとあてはまっている。

主人公の秀美は、私達が常識だと思っていることに迎合しない。自分がやりたいと思うこと、正しいと思うことに常に忠実だ。そんな秀美は、価値観の違いによって、同級生や先生と何度も衝突するが、いつも秀美によってその価値観はあっけなく崩されていく。その様子は読んでいて気持ちがよかったのだが、同時に、私が今まで信じていたものは何の根拠もなく、ただ世間一般の常識に影響され、勝手に決めつけていただけのものである

と気付かされた。人を殺すことはいけない、不倫はいけない、とあたり前に決めつけていたが、「いけない」理由を納得できるように説明はできないだろう。理由なんて考えたこともなかったなんて、とても愚かだと思った。

この間国語で習った「『文殊の知恵』の時代」を思い出した。人それぞれ違う価値観による衝突を恐れることなく、自分の意見を尊重しつつ、互いの違いを認めることが大切、というような内容だった。だけど、年を重ねるにつれ、それはやはりとても面倒臭い作業になる。私達は周りに合わせて、同じフリをしているのではないだろうか。だから、自分の意見を尊重し続ける秀美は、その中で「特別」で、目立った存在になっている。しかし、「自分は勉強は出来ないが、女にモテる人気者だ」という価値観が「勉強ができる」人を馬鹿にしているように思える。桜井先生や秀美の母が言う通り、「勉強ができない」というのはただの開き直りで、秀美が斜めに構えていると感ずるところだった。だから、最後の「勉強ができるようになりたい」という言葉に感動した。同時に、私が今までなんとなくしていた勉強を、肯定されたような気がした。

秀美の母が、秀美の小学校の担任との話で大人の女性の立場から見た、魅力的で素敵な男性

を語っていたけれど、それは人間一人一人にあてはまることだと思う。「社会の立場から外れないように外れないように怯えて、自分の価値観をゆだねる」という生き方は、たしかに楽かもしれないが、つまらない生き方だと思う。そのつらみがないかも、いつの間にかそんな風になってしまうこともあるかもしれない。でも、自分なりの考えや意見を大切に、「人と同じ部分も、違う部分も素直に認める」ということは、なんて面倒くさくて、困難で、でも素敵な生き方だろう。

秀美は赤間さんを傷つけてしまったことで自己嫌悪に陥り、何も知らず、知ろうとしなかった自分を恥じたが、そのことがあったから成長したのだと思う。そしてまた、成長しようとしている。「勉強」というのは、数学や国語などの学問のことだけでなく、人間としての勉強という意味も含まれていると思う。

私は秀美のように、強い個性があるわけではないし、流されやすい。だけど、学問としての勉強はもちろん、人としての勉強もたくさんして、何度も失敗して、その分成長したい。自分なりの意見を大切に、人と同じ部分も、違う部分も、素直に認められる人になれば、将来何になっても、幸せなのではないかと思う。